

(別添4)

【王寺町】

1人1台端末の利活用に係る計画

1. 1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

本町では、授業における教員の指導及び児童生徒の学習において、1人1台の端末を日常的に活用できるよう取組を進めてきている。具体的にはすべての町立義務教育学校に教師用デジタル教科書を導入するとともに、児童生徒が、教科書に導入されているQRコードを活用したデジタル資料を活用したり、児童生徒用端末に搭載している学習支援アプリ（ロイロノート、ジャムボード、GOOGLEスライド等）を活用したりできるように、ICT支援員やエバンジェリストを中心に日常的に研修を積み重ねてきた。また、端末を日常的に活用することで、ICTの活用が特別なことではなく「当たり前」のこととなるようにするため、授業での活用にとどまらず、家庭学習でも活用を図るようにすべての学年を対象にデジタルドリルを導入したり、宿題としてインターネットを活用した調べ学習においては、調べたことや考えたことをロイロノート、ジャムボード等のアプリを使って整理したりしている。

このように、児童生徒がICTを活用して、実際の社会で行われているような方法を児童生徒が行うことにより、児童生徒自身が一人一端末を「文房具」として自由な発想で活用できるようにすることを目指している。

また、個別最適な学びを実現するために、ICTを効果的に活用していくことを目指している。具体的には前述したデジタルドリルの活用である。本町が導入したデジタルドリルは、その教材会社が実施している総合的な学力調査の結果と連動し、一人一人の児童生徒の回答状況に応じた復習課題が提供されるようになっている。また、AIドリルの機能を併せ持っているため、児童生徒の回答状況に応じて適切な問題を設定して一人一人に応じた問題が提供されるようになっている。こうした児童生徒の学力調査の結果や日々取り組んでいるドリル学習の結果は学習履歴（スタディ・ログ）として蓄積されていく。蓄積されたこれらの学習履歴（スタディ・ログ）を分析・利活用して、児童生徒一人一人に寄り添ったきめ細かな指導、学習活動・機会の充実につなげることができるよう、活用の在り方について研修を進めているところである。

さらに、不登校傾向のある児童生徒の学習保障のツールとして1人1台端末は有効である。児童生徒にとってオンラインによる授業参加や授業参観は学校（教員や友達）とのつながりを感じられたり、学習内容の理解につながったりすることとなり、児童生徒の社会的自立へ向けて進路の選択肢を広げる支援へとつながっていくと考える。

2. GIGA第1期の総括

GIGA スクール構想により配備される1人1台の端末は、この端末からネットワークを通じてクラウドにアクセスし、クラウド上のデータ、アプリ等の各種サービスを活用することを前提としているため、学校内外と接続するネットワークが高速大容量であることが必要不可欠である。本町では令和4年4月の小中学校を2校の義務教育学校への再編

統合に合わせて、校内の全ての教室等で端末が活用できるように、10ギガの通信ネットワークを整備し、さらにすべての教室に電子黒板機能を有する超短焦点型プロジェクターの配置、1人1台端末の有効活用を図るために全教員に児童生徒と同じ端末の配付、教師用デジタル教科書の導入、学校図書館を随時活用できるようにオープンスペースのメディアセンターへ変更する等の環境整備を行ってきた。

こうした環境の下、教員がICTを活用した授業を行うことはもちろん、児童生徒の主体的な学びや協働的な学びにつなげるため、児童生徒が学習ツールとしてICTを活用できるようにするため、授業の中で児童生徒がICTを活用する授業を創造するための研修をエバンジェリストやICT支援員により行っている。なお、ICT支援員は実際に授業時に教室の中で教員の指導のサポートにも入り、実践的にICTを活用した授業実践へとつなげている。

現状では、日常的にすべての教員がICTを利活用する授業実践に取り組み、児童生徒もICTを活用した学習に取り組んでいる。

課題としては、教育情報セキュリティポリシーの指導をしっかりと行ったうえで、クラウドの活用を図る必要がある。しかし、指導を行い、必要なフィルターはかけているものの検索サイトからゲームのサイトへいきゲームをしている児童生徒や授業時に検索サイトで調べ学習をしているときに関係のないサイトへ飛び、学習に参加しない児童生徒が現れたりしている。その都度児童生徒へ指導を行うとともに、保護者に対しても啓発を行い、これからの時代を生きる児童生徒にとって必要な力を培うためにICT活用を図っていることの理解を図り、取組を進めていこうと考えている。

また、デジタルドリルの活用を図るうえで、紙のドリルとデジタルドリルの特性をふまえた使い分けが必要であるということが明らかになってきた。

デジタルでは、動画や音声で示すことマルチメディア教材が活用できるため具体的にイメージでき、理解を深めやすいという特性がある。さらに、漢字や計算などのドリルタイプの学習でもレベルに合った問題に取り組み、正誤がすぐにわかため、児童生徒の学習状況に応じて学習が進められるという利点がある。一方、紙は、長文読解や文章題の学習において、必要な箇所に下線を引いたり、読み返したりしやすいので、じっくり考えながら取り組むことができる。また、何度も書き取りをして漢字の読み書きを定着させるという学習においても紙のドリルの方が適しているという実態も明らかになってきた。鉛筆で書くということで生まれる学習の実感性は紙ならではの特性であると考ええる。今後はデジタルと紙それぞれの特性を生かした学習の実現を図るように取り組んでいく必要があると考える。

3. 1人1台端末の利活用方策

前述しているように、1人1台端末の利活用は個別最適な学び等これからの学校教育のめざす姿を実現するために必要不可欠である。

① 「1人1台端末の積極的活用」

本町ではエバンジェリストやICT支援員による校内研修を随時開催し、教員のICTの積極的活用を進めている。特に、ICT支援員は授業に参加し、授業実践におけるICTの活用を具体的に支援するようにしたり、ICTを活用した指導事例を紹介・提供し、教員たちの教材研究のサポートを行ったりしている。また、県教育委員会が主催するICT活用に関する研修にも積極的に参加するように呼び掛け、教員たちも参加している。

こうした取組は「ICTを“すぐにでも”“どの教科等でも”“誰でも”活用できる」を実現するために行っているものである。充実したICT環境の下、日常的に活用することにより、児童生徒がICTを「文房具」として自由な発想で活用できるようにし、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていきたいと考えている。

デジタル教科書については、教師用デジタル教科書を導入し、児童生徒の主体的な学びの実現につなげてきている。また、児童生徒用デジタル教科書は文部科学省から配付された英語のデジタル教科書（5年生から9年生（中学3年生））と算数・数学のデジタル教科書（5年生から9年生（中学3年生）2校中1校のみ配付）を活用して、デジタル教科書の在り方について実証的に検証していく予定である。

②「個別最適・協働的な学びの充実」

これまでから「調べ学習」においては1人1台端末を用いた学習を積極的に行っている。さらに、デジタルドリルを導入したことにより、一人一人の回答状況をAIが判定し、その子に適した問題の提供を行い、その子に適した学習の実現を図るという個別最適な学びにつながる学習も取り組んでいる。

学習支援アプリである「ロイロノート」や「ジャムボード」の活用により、自分の考えをまとめ、発表・表現するという学習活動は定着している。さらに、「ロイロノート」や「ジャムボード」の活用は自分から発表することに対して消極的だった児童生徒の意見を学級で共有したり、教員が学級の友達に紹介したりする学習活動につながり、互いに認め合い、考えあうという学習の実現につながってきている。

教員と児童生徒がやり取りする場面では「GOOGLE クラスルーム」でやり取りをしたり、「ロイロノート」を用いてコメントをしたりすることで、児童生徒とのやり取りをしている。このようにアプリを用いてのやり取りは、気になる児童生徒とのやり取りすることにも活用できている。

③「学びの保障」

本町では希望するすべての不登校児童生徒を対象に1人1台端末を活用した授業への参加・視聴を提供している。

病気療養児は存在しないが、生理痛で欠席している児童生徒や感染症で欠席している児童生徒を対象に1人1台端末を活用して授業への参加・視聴を提供している。この取組は学習保障につながると、児童生徒、保護者から喜ばれている。

また、不登校等で欠席している児童生徒と1人1台端末を用いて教員が話をするすることで、児童生徒の思いを受け止めることにつながり、信頼関係の構築につながっている。

これまで述べてきた取組は、今後より一層の充実を図る必要がある。本町でも1人1台端末の利活用をさらに進めていく必要があると考えている。本町が端末を導入し令和7年度で5

年が経過し、更新の時期を迎えることとなる。児童生徒向けの1人1台端末環境を引き続き維持するために国の支援を受けながら取組を進めていきたい。